

Title

遊とあそび

Name

細谷 暁夫

はじめに

オンライン講演でご縁ができて「利他ちゃぶ台会議」の「遊び」についての討論に参加しました。理系の私でも抵抗なく会話に入っていくことができました。ただし、私が専門としている物理よりも、たとえば牧野富太郎のように観察し標本を作る博物学的なアプローチの方がいいのかな、と思います。人口に膾炙した言葉を丹念に蒐集していくと「利他」が姿を現してくると思います。

私は孫に「世のため人のために働く人になりなさい」と、説教しますが、「世」と「人」はいつも対で出てきます。自でも他もない全体である「世」のためだけではなく「顔の見える」具体的な人にも尽くせというのです。逆に単に他人の為に尽くせという志が低くなる気がします。

「遊び」

今回の特集は「あそび」ですが、国語辞典を開くと、プレイの意味のほかに「余裕」の意味が出てきます。普通、その意の場合は「あそび」と平仮名で書くようです。たとえば、車の運転をするときのハンドルには空回りに「あそび」があります。機械仕掛けのものに「あそび」がないと、とても危険になるでしょう。洋服の仕立てにも、それがあるからこそ楽に着たり脱いだりできるわけです。英語では allowance が対応すると思いますが、「遊」の意味は持ちません。

この「余裕」という観点から、上記の討論会に出たものを材料に子供の「遊び」を考えていこうと思います。最近、とてもよくデザインされた安全で社会性が身に付く遊園地ができていると聞いています。人気があり、子供たちが列をなして順番待ちをするそうです。そうすると、モタモタさせずに効率的に、次から次に遊具を渡り歩かせることになります。「ちゃぶ台会議」では、これって遊びなのかという問題提起がされました。ディズニーランドみたいだという人もいました。私は、ディズニーランドには行ったことがありませんが、ロサンゼルスユニバーサルスタジオには子供を連れて行ったことがあります。飽きさせず充実していましたが、帰りにはどっと疲れが出ました。

私が子供の頃は、学校から帰るとランドセルを玄関口に投げ出し、近所の友達と遊びました。何をするかは成り行きで決まり、馬跳びになることも石蹴りになることもありました。「成り行きで決まる」ので、みんなが楽しめ

るようにテーマが自然に選ばれていたように思います。小さい子がいたら馬跳びはやめて石蹴りに変えたり、たまたま男の子ばかりになると、誰から言い出すともなくチャンバラに切り替えたりしました。

「遊び」の中の勇気

馬跳びは、遠くから助走して下を向いている子の背中に跳び乗るもので、双方にリスクがあります。跳べと言われても、直前で怯んでしまう子もいました。それを周りで励まして、うまくいくと皆で「やれるじゃない！」と褒められるのです。住んでいたのは北海道でしたので、冬には雪が積もりました。子供達は小さなシャベルを持ってきて、斜面にジャンプ台を作ります。初めての子は、もんどり打って頭から積雪に突っ込むことになりませんが、勇気を出してうまく飛べるようになると、一人前の扱いを受けます。コミュニティの中で勇気を養うことを遊びの中で行ってきたと思います。その中で、皆に一目置かれる子は勇気のある子です。

「遊撃手」「遊学」「遊歩道」「遊星」

これらの四つの言葉には、いずれも「遊興」の意味はなく、定まったポジションを持たないことから来ています。たとえば、野球のショートは守るべき「塁」を持たないので「遊撃手」です。「遊学」について言えば、伊達藩の藩校にいたものが長崎にオランダ語の勉強に行くなどは「遊学」です。それを「仙台に学び長崎に遊ぶ」などと大和言葉で言うので、どこかに羽をのばすというニュアンスが入り好きです。遊歩も行き当たりばったりに散歩するという意味でしょう。晩秋の軽井沢を散歩中に、東工大ゆかりの加藤与五郎先生揮毫の石碑「遊歩則創造」に出くわしました。色づいた灯台躑躅に囲まれて佇んでいました。

量子力学の創始者の一人であるディラックが散歩中に古典力学におけるポアソン括弧式の記号{ , }と量子力学における交換子積の記号[,]が似ていることから正準量子化を思いついたという逸話があります。ただ記号の定義を思い出せなかったので散歩の後に教科書を調べたそうです。これこそ「遊歩則創造」です。

「遊星」という言葉は廃止され、「惑星」が現在使われています。見かけ上どこの星座にも属さず、夜空を彷徨っているようだから付けられた名称です。前者を京都大学学派、後者を東京大学学派が推して争ったと俗に伝えられています。真相はもっと友情あふれるものだったとNHKの「チコちゃんは何でも知っている」が解説しています。

「遊学」の「遊」については国語辞典によっては誤用から始まったとされます。中国語では似はいるけれどもう(さんずい)のついた別の字(游)を当てます。年月を経て日本語の「遊び」のニュアンスの中に気ままさが入り込んでいます。

それを居直った雑誌が『遊(ゆう)』(工作社)でした。松岡正剛たちが主に寄稿し、稲垣足穂の特集を組み、美貌と明晰な頭脳を兼ね備えたお嬢さんたちが最先端のファッションに身を包み、フロリダに隠居していたディラックを突撃インタビューしたり殺風景な筑波の高エネルギー研究所を闊歩したりしていました。贅沢な雑誌でした。

「遊び心」

大人の場合、日常を離れ気ままに考え、プチ勇気を出して新しいことをやってみるのが「遊び」でしょう。典型例が中谷宇吉郎の随筆「立春の卵」にあります。「立春に卵が立つ」を迷信と一蹴したり、天体力学的に説明しようとしたりせずに、ちょっとやってみて、立春に限らずいつでも立つことを実証できたという話です。コロンブスはせっかちで真面目過ぎたのかもしれませんが。

「遊び心」のある人は人の心を和ませるありがたい存在です。最近亡くなったエリザベス2世のユーモアもその例です。授業の仕方について具体的なアドバイスをしているMIT発行の手引書には、授業中にJokeを言うタイミングについてアドバイスがあります。的確なところで短く冗談を言って、次のテーマに移るのです。アメリカ人の友人がそのネタとして、Profession Jokesという職業別の冗談が豊富に掲載されているサイトを紹介してくれました。一例を紹介します。

「半分黒い羊」

スコットランドの田舎道を、経済学者、物理学者、数学者が一緒に散歩しておりました。そこに羊が一匹現れたので、経済学者は「スコットランドの羊は黒い」と叫びました。それを物理学者は不正確であると嗜めて「スコットランドには黒い羊が少なくとも一匹いる」と言うことを勧めました。数学者は、それも大いに不正確として「スコットランドには少なくとも片側黒い羊が少なくとも一匹いる」と言うことを提案しました。

このジョークは結構受けて、東工大の中に広がりましたが、後日談があります。私が数学の先生たちに感想をお聞きすると意見は真二つに分かれました。一方は「これは数学者に対する悪口である」としましたが、他方は「その数学者は全く正しい」というものでした。遊んでいたのは私の方でした。

笑い遊び

冗談は笑いを期待して工夫するものです。遊びと笑いの関係はどうでしょう。確かに、遊んでいる子供たちの笑い声は楽しいものですが、初めから終わりまで笑っているわけではありません。けん玉をしているときは真剣そのもので、うまく行くと「やったー」と笑います。卵をテーブルの上に立てるときは指先に神経を集中させていますが、首尾よく立った時には破顔一笑です。

イメージーション

遊びは思いつきで始まるので、道具など足りないことが多いです。ままごとの場合、ゴザに小枝を置いて襖のつもりにしたりします。忍者ごっこでも、忍術などできるわけもないので、独特の印を結ぶことで猿飛佐助と霧隠才蔵を区別します。

さらに他者との関わりも考慮に入れると、遊びの方が仕事よりもイメージーションの分だけ次元が一つ高いよう

に感じます。友達がいることにした一人遊びもあるし、大勢で遊ぶ時に亡くなったお婆ちゃんも参加していた気持ちになったこともあり、そこには暗黙の物語が流れていました。



細谷 暁夫 《君も果物？》2023年